

がんと妊孕性温存チームの取り組み
～医療連携を目指した近隣施設での啓蒙講演活動～

◎宮喜由紀子¹⁾ 下西祥子¹⁾ 福田愛作¹⁾ 森本義晴²⁾

1) IVF 大阪クリニック 2) HORAC グランフロント大阪クリニック

I. 緒言

がん治療前に妊孕性温存を希望され生殖医療を受ける患者の増加に伴い、A 院では 2013 年に医師・看護師・心理カウンセラーを中心とした「がんと妊孕性温存チーム」を立ち上げ支援している。これまでの看護支援の経験より、がん診療施設との情報共有の必要性を痛感し、医療連携の新たなあり方について検討したので報告する。

II. 実践内容

化学療法や手術後に妊孕性温存目的で来院され採精したが無精子症にて凍結出来なかった 2 事例、手術後で体調不良のなか精子凍結となった 1 事例、に焦点を当て問題点を検討した。その結果、がん診療施設における生殖医療の知識不足や妊孕性温存の方法に関する情報が周知されていない事実が浮かび上がった。そこで情報提供及び医療連携の重要性について近隣のがん診療施設に出向いて勉強会を実施し、それぞれの立場から疑問を出し合い情報交換を行った。

III. 結果

がん診療施設の医師やスタッフに妊孕性温存について知識を提供することや A 院の妊孕性温存のためのシステムを伝達できる絶好の機会となった。がん診療施設側の意見を得た事で、妊孕性温存の情報提供書やパンフレットの改良、その情報のがん診療施設が利用しやすい工夫など更に妊孕性温存チームで見直すきっかけとなった。

IV. 考察

精子凍結困難例を検討し、医療連携を円滑に行うために何が必要かを考え、がん診療施設への啓蒙活動に至った。がん診療施設側に生殖医療について知ってもらうことで、妊孕性温存を必要とするがん患者にがん治療前に有益な情報が提供される機会が増加すると考える。

V. 今後の課題

今回男性がん患者の妊孕性温存について焦点を当てたが、女性患者では卵子・受精卵凍結まで両施設間で複雑な情報のやり取りが必要となる。より確実な妊孕性温存のため生殖医療施設がイニシアチブをとる連携システム構築が必要であると考えられる。